

Akihisa 森のようちえん園長

原 淳一さんに聞く

編 集 部

「子どものからだ調査2015」調査（子どものからだと心・連絡会議）結果で、「家庭・地域・学校での実践課題」として、次のことが提案されている。

・子ども自身を自らの“からだと生活の主人公”からだと生活の科学者”に育てよう。

（中略）

・日中の外遊びを通じた身体活動と受光、さらには夜間の暗環境を保障しよう。

・“ワクワク・ドキドキ”できるような熱中体験を保障しよう。

全国各地で様々なスタイルで活動している「森のようちえん」は、その提言に応える実践をしている。（参

考文献参照）

そこで、新潟市秋葉区で「Akihisa 森のようちえん」を運営されている原淳一さんに、実践の様子を伺った。

○なぜ自然の中で子どもを育てる大切さを考え、この園を開設したのでしょうか。

私は造園会社も営んでおり、昔は、私自身公園もたくさん造りました。でも、今の公園は、「これはしていい」「これはしてはいけない」と決まりすぎていて、子どもたちが遊びにくくなっています。子どもたち本来の、虫を採ったり、ザリガニを採ったり、木に登ったり、どろんこになったりという所が本当になくなってしまったと思います。そこで、そういう場所を取

り戻して行かなければと思い、2005年から任意団体を立ち上げ、秋葉山の荒れた里山で、子どもたちを遊ばせるための整備活動を始めました。

このような活動をしている間に、ドイツに研修に行く機会がありました。ドイツで森のようちえんを見て、本当に大切なものはこういうものなんだろうな。

自然環境が大切であることを知識ということだけでなく、心からそう思える気持ちを育てなければ、ビジネス論理に負けてしまう。

今、さかんにエコが叫ばれていますが、ちよつと語弊があるかもしれません、その中にはビジネスで儲かるからエコをやっているという人も少なからずいるのではないかと感じています。本来は、自然環境を守るために行われる活動が本質のはずです。この本質がずれてしまうと、環境に多くの負荷をかけてももつと儲かるビジネスモデルが出てくると、またそつちにくら替えをしてしまうのではないかと感じています。だからこそ、ちゃんと子どもの頃から自然に触れ、自然への愛着を育てていって、心の土台から自然環境は大切だと感じる人を育てていかないと、と強く思いました。

現在高校3年の娘が生まれたとき、地球温暖化の問題が大きく話題になっていました。その時期に自分の娘が生まれ大きくなつたとき、この環境に住むことができなくなってしまうのではないかと考えました。私も自然に携わる仕事もしていましたし、この状況に、大人としての何らかのアプローチが必要だろうという強い思いもありました。そしてドイツ研修に行ったことをきっかけに、これだと直感し、先ず自然への愛着や自然が好きという心を育てることがまず必要だろう。そのために、「森のようちえん」を創ろうと決意したのが、経緯です。

○一日の活動を教えてください。

登園は8時15分から8時50分です。9時から9時30分までウォーミングアップタイムです。子どもたちを思い切り遊ばせます。私たちは、この時間を大切にしています。この時間で思い切り遊べると、子どもたちすこく落ち着きます。

9時30分くらいから朝の会になります。スタッフが、森は生きているという唄を歌い始めると、子どもたちが集まって輪を作り、会が始まります。これを始めた

のは、デンマークを視察していたとき。経験豊かな女性の先生が朗々と歌うと、子どもたちが森の中から現れ輪を作る。「集まって」と言うのではなく、唄を歌うことで集まる、なんてメルヘンなことかとすぐく感銘を受け、私たちも始めました。

そして名前を呼んでからみんなで論語を暗唱します。1か月ごとに1つ、1年で10個の論語を暗唱します。3年間、同じ論語を繰り返し暗唱します。上の子は新しい年になると何となく分かって唱えます。下の子はそれに引つ張られて唱えます。上の子がいい手本になっています。3年間で10個なので。卒園児は何となく身にしみて、卒園して行くのではないかと思っています。それを終えると、10ほどあるフィールドのうち、今日出かけるフィールドを伝え、身支度をして出かけます。子ども達が慣れてくると、投票BOXで候補地を3つづらいあげて、みんなの投票で行き先を決めることもあります。それはドイツの森のようにえんが民主主義という観点から、行き先は自分たちで決める。自分たちのことは自分たちで決めるということを実践するために投票していたのですが、毎回ではないのですが、私たちも取り入れています。

雨が降っても基本的に外に出掛けるようにしています。警報が出ているときは出掛けませんが、普通の雨なら雨具を着て外に出掛けます。勿論、雨宿りができるフィールドに向かいます。暖かいときは、お弁当も持って行き、そこで食べます。さすがに冬期間は、体が冷えるので森の基地に戻ってきて、食べるようにしています。だから、雨が降っても基本的には外で活動します。

だいたい11時30分頃まで自由遊びをして、お昼を食べます。午後もまた遊んで、だいたい13時45分頃になると、帰りの会を始めてお帰りになります。

原則9時から14時までの5時間保育のうち、スタッフ子どもたちに何かをさせる時間は、例えば朝の会や帰りの会などですが、1時間を越えないようにしています。在園する8割の時間は子どもたちが何かやりたいことをやる時間になっています。行事の前でもそれを守るようにしていますし、何か作成する場合でも、そうです。子どもたちの主体的な時間をなるべく奪わないようなスタイルでやっています。

森の子どもたちは、よく食べ、よく寝ますね。うちの娘も通っていますが、年中になった今は夜8時30分

くらいまで起きていますが、年少さんの頃は夕方5時に寝て翌朝まで寝ていました。本当に、よく遊び、よく食べ、よく寝ます。子どもたちにとつては、それが一番大切だと思つています。あたり前ですが、体は丈夫になります。

アレルギーもよくなる傾向があると感じています。1年を超えて、だいぶよくなつてきたと保護者さんからも聞いています。体のバランスが自然と整つていっているでしょうね。

○活動をするために、配慮していることを

紹介してください。

子どもたちの時間を大切にしていますが、その中に最低限のルールもあります。そのルール、枠組みをどうやって決めてあげるかということが非常に重要です。このフィールドでは、先生のいないところでは遊ばない、帽子をかぶつて遊ぶ、自分の背丈より長い棒を持たない、というルールがあります。

ルールを作るときは、とても慎重に作ります。作ることで子どもたちの創造性などが奪われないように決めていかなければなりません。そこで、どこまでを見

極めるかということがすごく重要になります。そのため毎日振り返りをし、スタッフでよく話し合いをやっています。ルールがないということは子どもたちを見極めなければなりません。

見守るつて簡単そうだけど、実はとても責任の負荷が生じることです。決められたルールがたくさんあった方が、その通りやつていれればいいので楽です。しかし、スタッフはみんな覚悟をもってやつています。覚悟をもってリスクと向き合わないと、子どもたちに主体的な時間が与えられない世の中になっています。

私達は、子どもに必要なものは環境とぎっかけと思つていて、環境を創ることをすごく意識しています。

子どもたちを育てると一緒に、子どもたちを育む環境も育てることがすごく重要です。子どもたちの様子と自然の変化を見ながら、適切に環境を整えてあげることができるかどうかで、子どもたちの日々の意欲的に過ごす環境は大きく変化すると思います。

よく保育プログラムはないんですかと聞かれるんですが、ないんですね。私たちがやっていることは秋葉山の四季を通した自然状況を把握していて、適切な時期に適切な場所に、子どもたちを連れて行つてあげる

ことよって、子どもたちは自分で何かを感じ取るという、機会を提供するということです。そして、子どもたちが自ら育つ力を信じていることです。

子どもたちにとって、遊ぶことが一番です。子どもたちから遊ぶことを取り上げてはいけません。子どもたちにとって、遊ぶことは生きることです。生きながら自分というものを創っています。だから、受け入れられて自分らしくいる時間があることで、自己肯定感 は生まれていくと思っています。

○活動を通して、子どもたちのからだと心、健康のようすを教えてください。

森は、適度に日が当たり木陰もあります。夏も涼しい木陰を探して外で過ごすことができます。だから、ここに來ている限りクーラーにはあたりません。それで体温調整などの免疫系とか自律神経系が当たり前に発達していくわけです。これは私達が発達させているわけではなく、子どもたちが自分で発達させているわけです。

体の均整がとれバランス感覚が育ちます。ポチャとしていた体型が締まります。自然のなかで遊ぶこと自

体で体が鍛えられます。

例えば体操教室等では、自分の番が来たら走り、飛びます。しかし、ここでは自分がやりたいときにやる。木に登りたいときに登る。自分の限界を、絶えず自分で押し上げながら遊ぶので、体はしつかりし強くなります。

また、いろいろなものに意欲が育ちます。意欲があるので、いろんなことに興味を持ち、いろんなものを遊びにする力がすぐ育ちます。だから何もなくても遊べるようになります。創造力が育ちます。

(棒の先を他の子に向けている子を、スタッフがしっかりと見守っている様子を見ながら)

学校なら絶対、教師が止めるところでしょうが、この子たちは、1年目の子たちははつきりしないところがあります。2年目、3年目の子になるとすぐく加減が分かるようになり、これで叩くと痛いという感覚があるので、ほとんど傷つけることはありません。

この子たちは本当に自分でいろんなことをやって、たまにこれはちょっと危ないってことをやって、スタッフに声をかけられてということを繰り返して。これ以上やると危ないとか、痛いなどということが分かるん

です。

今やつている周りに迷惑をかけるよう危ないことは、だんだんとやらないようになります。どうしてかというところ、これをやると相手がちよつと嫌な気持ちになるということ自分を気づいていくんですね。この子たちは自ら率先して痛い目に遭っているから、人の痛みや気持ちが分かるんですね。

これってすごく大事だと思っていて、この経験を積み重ねていくことが人としての勉強をしていると思っ
ています。

また、森の子たちは、目で見たものに無意識に体が反応するということができるようになります。例えば、急斜面を、転ぶことなく駆け下りることができるようになっていきます。

○活動を通して、子どもたちの他や環境との 関わり合いの様子を教えてください。

一般の保育施設の多くでは、○○ちゃんと××しなさいということがよくあるのではないかと思いますが、この子たちのコミュニケーションはほとんどが主体的です。自分が遊びたいなと思うから、あの子に声を

かけてみようか。その遊びに入れて欲しいから声をかけてみた。それでうまくいった。うまくいかない。ということをやを日々繰り返しています。どんなふうに言ったら、友達と気持ちよく遊べるか、日々体験です。3年間主体的コミュニケーションを繰り返し繰り返しやるから。必然的に自然とコミュニケーション力が日々高まっています。

雨が降ったら雨具を着る。暑かったら一枚脱ぐ、寒かったら一枚着るなど、周りの自然環境とコミュニケーションをとっています。それがすごく重要で、自分のことは自分でやるという当たり前のことが自然と育って行きます。

さらに大事なことは、広い環境とたつぷりとした時間があるので、自分の気持ちとコミュニケーションをとる時間が多いことです。例えば、友達とけんかをすることがたまにあります。そのとき、自分の気持ちが高ぶって、けんかをしてそして高ぶった気持ちが終息していきます。その変化を経験してみないと、自分の気持ちやどう変化していかかわかりません。自分の気持ちの変化を自分で感じる体験をすることは重要です。自分の気持ちとコミュニケーションする時間と環境が

ある。それがあつて初めて、他人の気持ちがわかるようになるのではないでしょうか。人間関係づくりのベースに、自分がなくてはなりません。自分の気持ちとコミュニケーションする時間がここにはあります。それがないまま大きくなると問題が大きくなるように思います。例えば、いじめが深刻になる。自分の痛みがわからなければ、他人の痛みはなおわからない。自分と向きあう時間というのが、実は人間関係のベースにあると考えています。森の子どもたちは、このようなことを体験的に会得していると思います。

また森のようちえんの子どもたちは平和的になると言われています。自分がちゃんと認められ、自分が自分でいられるから、穏やかになる傾向が強いです。

子どもたちは名もなき遊びをしますが、実はこういうことが自己肯定感に通じています。今の大人は意味のあることをすごく求めたがります。子どもたちは、ただやりたいからやっているだけの話です。それを認めてもらうだけで、あつ自分はこのままでいいんだ、ありのままでもいいんだということを感じ取って、自分の中で自分が育っているのだと思います。

(参考文献)

今村光章編著『ようこそ！ 森のようちえんへ 自然
の中の子育てを語る』（解放出版社 2013）

（文責 和澄利男・所員）

